

2021年4月18日(日)／説教者：國分美生

説教：「わたしは何者なのか」

聖書：出エジプト記2:11～15

「私はいったい何者なのか」それは、全人類の普遍的な体験で、宗教はその根源的な深い問いに答える役割を果たしてきました。

モーセはエジプト人に育てられながらも、自分がヘブライ人であることをしっかりと自覚していました。ですからエジプト人が、同胞であるヘブライ人を打つを見て我慢がならず、そのエジプト人を撃ち殺します。翌日、モーセは2人のヘブライ人の仲裁に割って入ろうとしますが、彼らはモーセを拒絶します。ヘブライ人にとっては、モーセは同胞ではありませんでした。ファラオの仕返しを恐れて異国の地に逃げたモーセの中には、殺されるという恐怖だけでなく、同胞から拒絶された大きな絶望があったと思います。たどり着いたミディアン地方で彼はミディアン人から手厚くもてなされます。仲間として受け入れられ、妻を迎え、息子も生まれます。それでもモーセの心には空洞がありました。息子につけた名前から、ここが本当の自分の居場所ではないという思いがわかります。モーセはずっと変わらずイスラエル共同体にアイデンティティを置いていましたが、現状を見るとモーセのアイデンティと実際の生き方にはずれがありました。本来「自分は何者か」というアイデンティティは私たちの生き方を決定づけ、向かっていくべき方向を指し示してくれるものです。モーセの人生もそのままではなく、その後神と直に出会い、召命を受け取ります。神は、イスラエルの民への救いの業をモーセを通して行うと決められました。思いはあっても、いざそのために動くというのは簡単ではない。モーセの躊躇する姿は私たちもとても共感するものですが、そのとき神はモーセに「私は必ずあなたと共にいる」といいます。私たちが神の召命にこたえる時、必ず神が共にいて、共に働く仲間も与えられます。モーセのアイデンティティは神に出会い、召命に応えることで一層ゆるぎないものとなります。この先も波乱は続き、エジプト脱出後もイスラエルの人々から、非難されたり裏切られたりということが続出しますが、「神が定めた自分の進むべき道」という確信が、最後までモーセを支えたと想像します。

私たちが「自分は何者なのか」を考えると、イエス・キリストとの関係なしには語れません。私たちは主に属するものであり、神がいつも共におられ、そしてともに生きる仲間と出会わされている。その喜び、恵みをこの一週間の支えとして歩むことができますように。(國分美生)